

荒川豊蔵（1894-1985）

多治見出身の陶芸家・荒川豊蔵は、16 世紀から 17 世紀にかけての美濃焼の技術を再発見・再興した人物である。彼は生前、経済的な成功を収めることはできなかったが、芸術としての陶磁器を普及させるために精力的に活動した。

古陶磁の復活に興味を持ったのは、1930 年、タケノコの紋が入った志野の茶碗に出会ったことがきっかけだったようだ。その時、茶碗の底に少量の赤土が付着していた。当時、志野の発祥は美濃ではなく瀬戸だと考えられていた。しかし、赤土は瀬戸にはなく、美濃にはあるということを知った。その 2 日後、彼は牟田洞（現在の可児）の窯跡を見つけて発掘を開始し、同じタケノコの紋が入った志野の陶片を掘り出した。この発見により、美濃で志野が生産されていたことが決定的となり、古窯跡を発掘して志野、瀬戸黒、黄瀬戸、織部などの源流をたどる動きが始まった。

荒川は、1933 年に牟田洞遺跡の近くに自分の窯を作り、美濃の古陶磁の技術を再現することに取り組んだ。その結果、1955 年には、無形文化財の保存に多大な貢献をしたことが認められ、人間国宝に認定された。2021 年現在、志野と瀬戸の 2 つのやきものでこの認定を受けている史上唯一の人物である。

伝統的な志野が円筒形で白色を基調としているのに対し、下の茶碗のような丸みを帯びた側面とピンクがかった色調は、豊蔵の志野作品の特徴である。